

# 富山県庄川流域における「がんもどき」 の方言分布とその解釈

川 本 栄 一 郎

## 一

富山県庄川流域は、これまでもしばしば述べてきたように、方言分布のきわめて複雑多岐な地域である。方言量がそんなに多いとは言えない「がんもどき」の場合でさえ、ヒローズ、マルヤマ、マルアゲ、ガンモドーフといった四種類もの俚語を持っている。石川県にはこのほかにミイデラという変わった俚語も分布しているが、石川県における「がんもどき」の方言分布についてはまだ調べが十分ついていないので、解釈の見通しを述べるにとどめ、本稿では富山県に分布するヒローズ、マルヤマ、マルアゲ、ガンモドーフだけをとりあげ、この地域における「がんもどき」の方言の歴史を探っていくことにする。

## 二

資料は、いわゆる「なぞなぞ式」によって集めた。採色した「がんもどき」の絵を話者に示しながら、「豆腐の中に人参や牛蒡を細かく刻んで入れ、油で揚げたこういう食べ物のことを、ここのことばでは何と言いますか。」と尋ね、答えてもらった。

調査は、昭和四十五年九月から翌年三月にかけて行なった。調査地点は全部で七十一。その位置は、地点番号を用いて図1に示してある。話者はすべてその土地で生れ育った老人である。年齢は七十歳を基準とし、女性を調べた。話者の性別と生れ年は、(注1)の拙稿に示してあるので、本稿では省略し、地点番号と地点名だけを示す。

|        |        |       |        |        |        |        |
|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1 二俣   | 2 田島   | 3 下辰巳 | 4 堂    | 5 金沢   | 6 津幡   | 7 石動   |
| 8 中田   | 9 字波   | 10 阿尾 | 11 氷見  | 12 横山  | 13 谷屋  | 14 万尾  |
| 15 飯久保 | 16 島尾  | 17 雨晴 | 18 伏木  | 19 高岡  | 20 戸出  | 21 福岡  |
| 22 柳瀬  | 23 太田  | 24 出町 | 25 筏   | 26 青島  | 27 小牧  | 28 井栗谷 |
| 29 井波  | 30 城端  | 31 重安 | 32 福光  | 33 中河内 | 34 梨谷  | 35 杉尾  |
| 36 祖山  | 37 下梨  | 38 下出 | 39 上梨  | 40 細島  | 41 菅沼  | 42 西赤尾 |
| 43 椿   | 44 小白川 | 45 椿原 | 46 鳩ヶ谷 | 47 大勤場 | 48 坂上  | 49 利賀  |
| 50 上百瀬 | 51 庄   | 52 安川 | 53 福岡  | 54 中田  | 55 島   | 56 二塚  |
| 57 小杉  | 58 呉羽  | 59 大門 | 60 松木  | 61 新湊  | 62 海老江 | 63 四方  |
| 64 富山  | 65 新庄  | 66 滑川 | 67 魚津  | 68 鹿熊  | 69 泊   | 70 境   |
| 71 市振  |        |       |        |        |        |        |

次に掲げる図1は、庄川流域ならびにその周辺における「がんもどき」の方言分布を示したものである

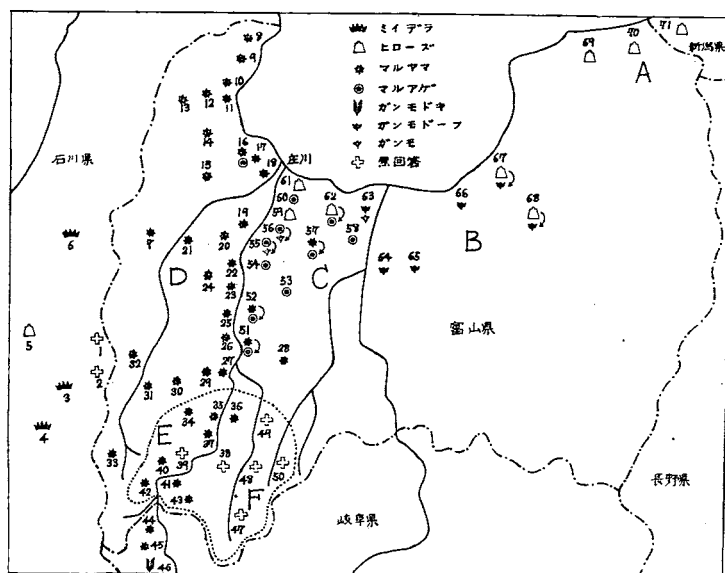


図1 「がんもどき」の方言分布

図1によると、ヒローズが東西に分かれて分布し、その間にマルヤマ、マルアゲ、ガンモドーフが分布しているが、これは、かつてこの地域一帯に分布していたヒローズが、後で生じたマルヤマ、マルアゲ、ガンモドーフによって分断され、こういう分布を示すことになったものと解釈される。この解釈によると、この地域における「がんもどき」の方言の歴史は、

ヒローズ→マルヤマ、マルアゲ、ガンモドーフ

だということになる。海老江(62)以下、地点番号は( )で括弧で示す。の話者の「ヒローズは古くマルアゲは新しい」という説明および魚津(67)・鹿熊(68)の話者の「ヒローズは古くガンモドーフは新しい」という説明は、ともに、この推定を裏付ける有益な一つの材料になり得る。

それでは、ヒローズは、どの地域にとってもみな一様に「がんもどき」の古い方言たり得るかというところではない。地域によっては、庄川上流の五箇山(点線で囲みである地域)や飛騨白川(五箇山の南に隣接する地域)などのように、ヒローズがもととも分布してはいなかったと思われるところもある。

庄川下流にならって考えれば、現在マルヤマが分布している五箇山の平村(34・37)・上平村(40・43)および飛騨の白川村(44・45)については、マルヤマの前にヒローズが分布していたということも考えられなくはないが、しかし、同じ五箇山の利賀村(47・50)に「無回答」が集中的に現われるという事実を見ると、はたしてそう考えてよいかどうか疑問に思われてくる。

なぜかというに、この地域に「無回答」が集中的に現われるのは食品「がんもどき」が、五箇山の中でも最も交通不便なこの地域にまだ普及しておらず、それを表わすことはまた行なわれていない

ためであると考えられ、そういう見方をさらに、「無回答」が二地点に見られる平村や上平村・白川村にもおしひろめて考えるに、食品「がんもどき」がこれらの地域に持ち込まれたのは、そんなに遠い昔のことではなく、それを表わすことばの歴史もまたそんなに古いものではないと推定が得られることになるからである。おそらく食品「がんもどき」は、そんなに遠くない過去のある時期に、名称マルヤマを伴って、ヒローズも何も行なわれていないこれらの地域へ、平野部のほうからはいり込んできたものである。このことを図式的に表わせば、これらの地域における「がんもどき」の方言の歴史は、 →マルヤマということになる。

飛驒白川の鳩ヶ谷(46)にはガンモドキが分布しているが、これについては、食品「がんもどき」とともに新しくはいり込んだ標準語のガンモドキということが考えられる。昭和三十四年に刊行された土田吉左衛門氏の『飛驒のことば』には、「ひりょうず(名)糰(うるち)と糰(もち)の粉を等分に水でねり、油であげたもの。古名飛竜頭から起る。がんもどき。(高山)がんもどきの低質なもの。(保井戸)」とあるが、白川村の場合は、同じ飛驒でも、高山・保井戸(保井戸は下呂の少し南にある高山本線沿いの集落)などとはちがって、交通不便な辺地であるから、五箇山の平村、上平村と同様、食品「がんもどき」もそれを表わすヒローズという古いことばも、もともと行なわれてはおらず、最近になってようやく食品「がんもどき」が、名称ガンモドキを伴って、この地域にもはいり込んできたと考えてよいと思う。

富山(66)周辺にも、ガンモドーフまたはガンモが分布しているが、これについても標準語の影響による新しい語ということが考え

られる。ただし、富山周辺の場合は、飛驒白川方面とはちがって、古くから他との交流のさかんな北陸街道沿いの地域であるから、この地域に分布するガンモドーフやガンモについては、標準語の影響による新しい現象ではなくて、江戸時代に江戸から持ち込まれた古いことばということも考えてみなければならない。

どうしてかという点、ヒローズとガンモドキとの間には、嘉永三年(一八五一)西沢一鳳著『皇都午睡三編中の巻』の「お餅をおそなへ油揚げを胡麻揚飛龍白を雁もどき(上は上方語、下は江戸語)」や嘉永五年(一八五三)喜田川季莊著『類聚近世風俗志別名守貞漫稿』の「飛龍子京坂にて「ひりょうず」江戸にて「がんもどき」と云雁屎也豆腐を崩し水を去り牛房笹掻麻の実等を加へ油揚げにしたるを云也」などの例からもうかがわれるように、古くから、上方語のヒローズに対する江戸語のガンモドキという対立があったからである。

もっとも、上方語のヒローズについては、宝永二年(一七〇五)貝原益軒著『大和本草巻之四』の「寒具(中略)今西土に製する牛蒡餅、ひれうすなど云物の製、これに似たり。粳米にて製したる尤よし」<sup>註</sup>、安永六年(一七七七)谷川士清著『倭訓栞』の「ひりうす料理の目にいへり蠻名なりとぞ」<sup>註</sup>、天明七年(一七八七)森島中良著『紅毛雑話巻之二』の「飛龍頭此邦にて云油揚げの飛龍頭はハルトガルの食物なり、其製左の如し、ひりうづは彼國の語のよしなり、粳米粉、糯米粉各七合、右水にて煉合せ、ゆで上て油揚げにしたる物なり」<sup>註</sup>、寛政十一年(一七九九)大槻磐水著『蘭說辨惑卷之上』の「昔この國の船多く渡りしよし其頃その國の辞この方に伝ひて今に残れるもの「かっぱ」「すっぱん」「いのんご」「まんでいか」「ひりやうづ」の類なるべし」「この國」とはポルトガ

ルのこと。」「<sup>注9</sup>」などの例からもうかがわれるように、その語源はポルトガル語の *filipe* にあると言われているので、そういう対立が古くからあったとしても、それは、ポルトガル語渡来以前のことではないということにならう。

新村出博士の『外来語の話』によると、「ヒリヨウズは、今の関東のガンモドキと同じく、豆腐の油揚げの一種を指すが、元は今のパウンド・ケーキ、又はワッフルなどと英語でいつてゐる菓子の名前であつたのである。<sup>注10</sup>」ということである。

もしそうであるとなると、そのことと関連して、そういうヒリヨウズがいつごろどういう事情で豆腐の油揚げの一種を指すようになったのか、宝暦七年（一七五七）成立の『浪花色八卦』に「油上の豆腐も爰で、ひりょうすといひ（「爰」は大坂新町のこと。）<sup>注11</sup>」とあり、また、明和七年（一七七〇）成立の『世間化物氣質』にも、「豆腐屋がひりやうずもつて来る。（場所は大坂道頓堀辺。）<sup>注12</sup>」とあるところを見ると、当時すでに大坂には、豆腐の油揚げの一種をヒリヨウズと呼ぶ言い方があつたということがわかるが、いつごろからそう言うようになったのか、その前はそういう食品のことを何と呼んでいたのか、そもそもそういう食品は、いつごろから我が国にあつたものなのか、江戸ではいつごろからどういふ事情でそれをガンモドキと呼ぶようになったのか、等々のことが問題となるが、今のところ、くわしいことはよくわからない。元禄十六年（一七〇三）江戸で成立した『広原海』という文献に「雁もとき骨に破戒の音のあり」とあり、寛政二年（一七九〇）成立の方言集『御国通辞』に「雁もとき小鳥嫌（上は江戸詞、下は御国（盛岡）詞）」とあるところを見ると、当時すでに江戸にはガンモドキということばがあつたという

ことになるが、その具体的な内容についてはよくわからない。

柳田国男監修の『綜合日本民俗語彙』では、ガンモドキということばの起りについて、「東京でガンモドキというのは商品名であろうか。モドキはよく似ているものことであるから、或は雁の味がするともいふたのであろうか。語の誇張は商品にはありがちである。」と述べている。<sup>注13</sup>

これまでまったく「がんもどき」という食品のなかつた筆者の郷里、青森県下北郡大畑町赤川という寒村にも、昭和四十六年七月に八年ぶりで帰ったら、食品「がんもどき」がはいっており、それを親類のS商店ではガマンドーフと呼び、「我慢できないほどおいしい豆腐だからガマンドーフというのだ」と宣伝しながら売っていたという事実があるから、『綜合日本民俗語彙』が述べているような事情もあり得ないことではなさそうに思う。

なお、鈴木勝忠氏の『雑俳語辞典』によると、宝永四年（一七〇七）江戸で成立した『箋緬輪前集』には、「丸山の豆腐花月の鯛もどき」という句が収録されているという。「鯛もどき」とはどんな食品なのかよくわからないが、ガンモドキと同じ構成の語が、先に掲げた「雁もとき骨に破戒の音のあり」と同じ頃の江戸の文献に見られるということは、まことに興味深い。

ガンモドキはこのように古くから江戸で使われていたことばであるので、江戸時代に富山藩の誰かがそれを江戸から持ち帰り、富山周辺に広めたということも考えられなくはないが、しかし、図1を見ると、魚津（67）・鹿熊（68）などでは、現在、ヒリヨウズからガンモドーフへの変化がさかに行なわれつつあるようだから、富山周辺に分布するガンモドーフ、ガンモについて、やはり、江戸時代に持ち込まれたものではなくて、標準語の影響によって生じた

新しい現象と考えるべきではないかと思う。

それでは、ポルトガル語から出たと言われる上方系のヒローズのほうは、いつごろ、どのような経路でこの地方に伝播したのであるか。見通しとしては、過去のある時期（たぶん江戸時代）に、北陸街道を伝って京坂方面からはいり込んで来たということが考えられるが、しかし、くわしいことはわからない。この問題については石川、福井、滋賀などにおける「がんもどき」の方言分布を明らかにした上で、また改めて考えてみることにしたい。

幸い、富山、石川の両県には、ポルトガル語の *aboboa* から出たと言われる「かぼちゃ」の方言ボブラも分布しているので、今後はそれも参考としながら、ヒローズの伝播経路を探っていくことにしたい。

#### 四

はじめにまずマルヤマとマルアゲの関係について述べる。

意味の上からすれば、「丸い揚げ物」という「がんもどき」の性質をびつたりと言いつわっているマルアゲのほうが、いかにもともとのことばという感じがするが、しかし、実際にはそうではなくて、マルヤマのほうがマルアゲよりも古いことばということになる。

どうしてかというに、庄(51)・安川(52)・小杉(57)には、それぞれマルヤマとマルアゲの両方が分布しているが、これらの地点の話者はいずれも両者の関係について、「マルヤマは古くマルアゲは新しい」と述べているからである。

島尾(16)の話者の「マルヤマともマルアゲとも言うが、丸い揚げ物

だからマルアゲが正しい。」という説明を参考に考えると、マルアゲの分布地域では、それまで使っていたマルヤマでは意味がわかりにくいので、「がんもどき」の「丸い揚げ物」という性質に着目し、マルヤマの「マル」にアブラアゲなどの「アゲ」を接続させてマルアゲという意味のわかりやすいことばを新たに作り出したのではないかと思われる。

言うなればこれは、民衆語源と混交による語の変改ということになるが、同様の事情は、マルアゲに隣接して分布する富山周辺のガンモドーフについても認められる。すなわち、この地域の人々は、標準語の影響によつてはいり込んで来たガンモドキを、語源のわかりにくいそのままの形で用いることをせず、「がんもどき」が豆腐から出来ているという点に着目し、ユドーフやコヤドーフなどの「ドーフ」をガンモドキの「ガンモ」に連接させて、ガンモドーフというわかり易い言い方を新たに作り出したものと思われる。筆者の郷里におけるガンモドーフの場合も、同様の事情によるものであるが、この場合は、それへさらに商売意識が加わり、ガンモをガマンと言いつわってしまったものである。

東条操博士の『全国方言辞典』によると、宍岐では、「がんもどき」のことをガンモドーフと呼んでいるという。豆腐から出来ているという「がんもどき」の性質に着目したこういう言い方が、下北、富山、宍岐といった直接関係のない地域に次々と発生しつつあるということとは、まことに興味深く思われる。

ところで、民衆語源や混交によるこのような語の変改は、富山県の場合、おもに富山を中心とする限られた地域で行なわれているということになるが、このことは、富山県における言語変化の動向を端的に示しているようであることに興味深い。というのは、富山県に

は、これまでもいくつかの拙稿でしばしば述べてきたように、言語の新しい変化はまずこの地域に起こり、それが漸次周辺へ波及していくというケースがいくつも見られるからである。次に掲げる「匂い」の方言分布にも、そういう動きがはっきりと現われている。

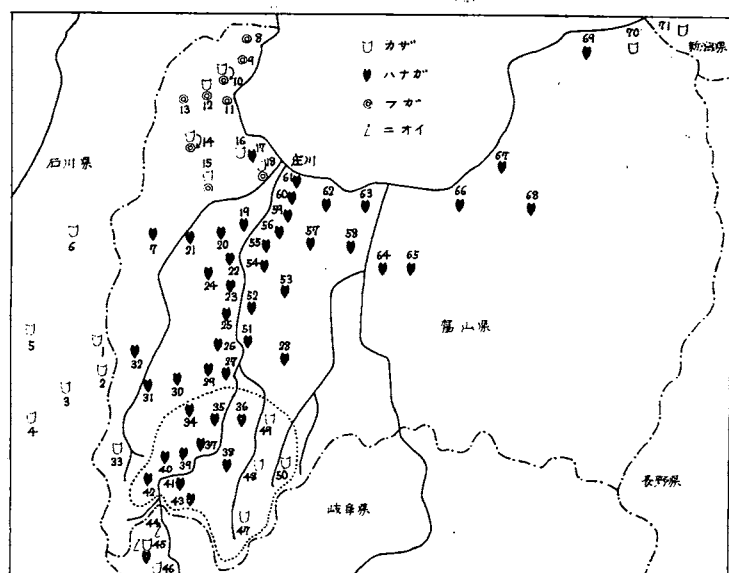


図2 「匂い」の方言分布

すなわち、図2は、富山を中心とする地域に起きたカザ↓ハナカという変化が周辺に波及し、さらに庄川を遡って五箇山にまで広まっていたと解釈される。

マルヤマとマルアゲの関係、ヒロイズとガンモドーフの関係について言えば、島(55)・二塚(56)・小杉(57)のあたりに起きたマルヤマ↓マルアゲという変化は、庄川東岸を遡る形で庄(51)のあたりまで広まっていたいき、富山(64)・新庄(65)のあたりに起きた、ヒロイズ↓ガンモドーフという変化は、四方(63)・滑川(66)・魚津(67)・鹿熊(68)のほうにまで広まっていたと解釈される。

ただし、ヒロイズとマルヤマの関係については、富山周辺を、ヒロイズ↓マルヤマの中心と見ることはできない。なぜかというに、すでに述べた通り、魚津(67)と鹿熊(68)には、ヒロイズが、マルヤマ、マルアゲを経由しないでガンモドーフへ直接変化していくという例が見られるし、また、分布の上から言っても、ガンモドーフを間にはさんで東西に分布するヒロイズをつないでいくと、ガンモドーフの分布地域における前の状態は、マルヤマ、マルアゲではなくてヒロイズであったろうという推定が得られることになり、富山周辺に、ヒロイズ↓マルヤマという変化を認めることができなくなるからである。魚津・鹿熊の例を参考に考えるに、富山周辺における「がんもどき」の方言の歴史は、ヒロイズ↓マルヤマ↓マルアゲ↓ガンモドーフではなくて、ヒロイズ↓ガンモドーフであったろうということになる。

大正八年(一九一九)刊行の富山教育会編『富山県方言』には、「〔がんもどき〕名(雁瀨)まるやま(西)圓灸」とあるが、(西)は「西砺波郡」(重安(31)・福光(32)・中河内(33)などの

地域)のことであるから、以上の推定は、この記述に抵触しない。

富山周辺が、ヒローズ・マルヤマという変化の中心でないとするれば、それではどこかということになるが、これについては、今のところ、伏木(18)・高岡(19)のあたりを考えている。岩井隆盛氏が、「語彙から見た能登」の中で述べておられるところによると、能登にもマルヤマが分布しているということなので、それを参考に考えると、マルヤマが伏木などの港に海からはいり込み、そこを拠点に周辺に広まっていったということが想像されるからである。マルヤマはおそらく伏木あたりから出発して庄川を遡り、五箇山・白川方面にまで広まっていったものと思われる。

マルヤマの語源ならびに伝播経路については、くわしいことはよくわからないが、鈴木勝忠氏の『雑俳語辞典』によると、宝永四年(一七〇七)江戸で成立した『箋繡輪前集』には「丸山の豆腐花月の鯛もどき」、宝永年間(一七〇四―一七一〇)に上方で成立した『宝永中秀吟三百番』には「桶が喰をさめ也丸山麩」享保十三年(一七二八)上方で成立した『万国燕』には「骨のなき円山料理水の味」などの例が見られるということであるから、庄川流域に分布するマルヤマについても、これらの文献に出てくる「丸山の豆腐」「丸山麩」「円山料理」との関連を考えながら、その出自や伝播経路を探っていくことが必要ではないかと思う。

## 五

これまで述べてきたことをまとめて示すと次のようになる。

A ヒローズ……………↓ガンモドーフ  
B ヒローズ……………↓ガンモドーフ

C ヒローズ↓マルヤマ↓マルアゲ……………↓ガンモドーフ  
D ヒローズ↓マルヤマ……………↓エ  
E           ↓マルヤマ……………↓エ  
F           ……………↓エ

A→Fは地域を示し(図1参照)、実線の矢印はこれまでの変化、点線の矢印はこれからの変化を示す。ただし、D・Eについては、マルヤマ↓マルアゲとマルヤマ↓ガンモドーフのどちらに進むことになるのか予想がつかず、また、Fについても、食品「がんもどき」が、マルヤマとガンモドーフのどちらを伴なっているのか予想がつかなかったので、ともにエとしておいた。いずれにしても、この地方における最も古い状態を示しているのは、食品「がんもどき」もその名称もはいつていないF地域であると言える。因みに、F地域には、「匂い」の古い方言、カザも分布している(図2参照)。

石川県に分布するミイデラ・ヒローズ・マルヤマ相互の関係については、いずれまた稿を改めて述べることにするが、見通しとしては、一応、次のようなことを考えている。

1、金沢にはヒローズ、そのまわりにはミイデラが分布しているが、これを見ると、ミイデラのほうがヒローズよりも古そうに思われる。金沢には過去のある時期に上方からヒローズがはいり込み、それまで行なわれていたミイデラが、ヒローズに変わってしまったのではないかと思う。

ミイデラについては、近江の三井寺との関係はどうかということや、上方から伝播したものなのかそれとも石川県で単独発生したものなのかということなどが問題となるが、まだ福井・滋賀両県の分布を調べていないので、何とも言えない。

2、ミイデラは、能登の輪島・町野などにも分布しているという。現在マルヤマが分布している能登の各地では、過去のある時期に、ミイデラからマルヤマへの変化が行なわれたのではないかとと思う。

マルヤマは、京都（もしくは長崎）の丸山から江戸時代に船で運ばれてきて、能登の港や伏木などにはいり込み、そこを拠点に周辺に広まったのではないかと考えられる。

3、ミイデラとヒローズ・マルヤマとの間には、古くは、自家製のミイデラに対する商品としてのヒローズ・マルヤマという区別や、佛事などの時でなければ用いないミイデラに対する日常食品としてのヒローズ・マルヤマというちがいがあったのかもしれない。ミイデラ・ヒローズ・マルヤマ相互の関係を探っていくこうとする場合には、そういう面に対する配慮も忘れてはならないと思う。

今後、調査が進むにつれて、以上の見通しは、大幅に改められなければならないことになるかもしれない。どういふ結果が出るかを楽しみに、今後も「がんもどき」の方言調査を続けていきたいと考えている。

(注1) 拙稿「富山県庄川流域におけるズーゾー弁の分布とその解釈」（金沢大学語学文学研究2）・拙稿「富山県庄川流域の方言分布」（金沢大学教育学部紀要21）・拙稿「富山県庄川流域における「ワ」と「バ」の分布とその解釈」（国語学研究12）など。

(注2) 東条操編『分類方言辞典』では、「がんもどき」の方言として、「がんどーふ・ことりもどき・ひりょーず」だけを示している。

(注3) 筆者の郷里、青森県下北郡大畑町赤川にも、つい最近まで「がんもどき」という食品がはいっていたいなかった。

(注4) 新群書類従第一・七二四ページ。

(注5) 類聚近世風俗志別名守貞漫稿下・四三四ページ。

(注6) 益軒全集巻之六・一〇六ページ。

(注7) 倭訓菜下・九六ページ。

(注8) 文明源流叢書第一・四六一ページ。

(注9) 大日本思想全集第十二巻・三八七ページ。

(注10) 新村出『外来語の話』一八二ページ。なお、金沢大学教育学部在学中の、ブラジルからの留学生、山本公子氏によると、ブラジルのポルトガル語でも、「メリケン粉にとうもろこしなどをに入れてねり、油で揚げた食品」のことを、*finhos* と呼んでいるという。

(注11) 浪花叢書第十四巻・三〇〇ページ。

(注12) 帝国文庫第三十編気質全集・六一〇ページ。

(注13) 小学館編『大日本百科事典』では、豆腐の歴史について、「豆腐はいまからおよそ二〇〇〇年前に、中国の前漢の高祖の孫、淮南王（？——前一二）が発明したのが初めてといわれている。そのため豆腐のことを一名「わいなん」ともいう。日本へは奈良時代に渡来した。しかし、最初は、貴族階級や僧侶たちが食し、一般に広まったのは、茶道が普及して、懷石料理が発達した室町時代以降であろうとされている。」と説明している。これによると、豆腐の油揚げの一種である「がんもどき」が一般に普及したのも、室町時代以降ということになりそうである。

(注14) 鈴木勝忠編『雑俳語辞典』による。



(注15) 国語学大系第二十卷・一〇ページ。

(注16) 綜合日本民俗語彙第三卷・一三三四ページ。

(注17) 九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会——』一六一ページ。

(注18) 「丸山」は、京祇園の後の地のことであり、豆腐はその名産であるという。

(注19) 「丸山麩」とは、京丸山の油揚げのことであるという。

(注20) 「円山料理」とは、豆腐料理のことであるという。

(注21) ミイデラは白峰・阿手・小松・美川などにも分布している。

〔付記〕この研究は、昭和四十五年度文部省科学研究費による研究の一部である。

(金沢大学助教授)